

斎藤徳元 四回

伊藤浩睦

斎藤徳元は、賦物(ふしもの)俳諧が得意だったとされています。今では「賦物」が分からなくなっていますが、鎌倉時代の連歌では当たり前のように用いられました。連歌会を行なう前にその日の賦物を決めておきます。仮に賦物を人と決めたら、人と熟語になる言葉をそれぞれの句に詠み込んで作るのです。人間、人情、人足、人夫、国人、罪人といろいろな熟語がありますが、その、間、情、足、夫、国、罪などの言葉を詠む句の中に入れるのです。

南北朝の頃に、二条良基によって「応安新式」が制定され、連歌の約束事が整備されますが、その時に良基は、賦物は無用と決めたので、室町時代には行なわれることが少なくなります。賦物を決めても発句のみに用いて、あとは使用を強制しないといった形式的なものになって廃れますが、徳元はこの賦物を使って俳諧を作っていくのが得意でした。

賦物は面倒な上に、言葉の選択を縛りますから、二条良基は無用としたのです。松永貞徳もその考え方で、俳諧にも賦物は無用としていました。徳元は百韻のかたちが整っていれば俳諧でも賦物を用いても良いとして、意見が対立したとされていますが、賦物は行なわれなくなって消えて行きます。こういう点では徳元の俳諧観は、古かったのかも知れません。少なくとも、時代を切り開いて行くような文芸ではなかったと言えます。

寛永十八年（一六四一年）、徳元は「俳諧初学抄」を著わします。この時、八十三歳ですから、長命とその衰えることのない知性には驚かされます。

一、俗語を用いること。

一、面白いこと。

一、興を催すこと。

一、初心者でも学びやすく和歌につながること。

一、語句の深い意味を知らなくても句を付けること。

この五点を徳元は「俳諧の五徳」と言い、初心者はこのことを心得れば、遊びつつ学ぶことが出来るとしています。取り立てて凄い内容と言うべきものではなく、貞門派の建前に添った穏当なものですが、現代の俳句の初心者に言っても通用するような内容であり、この時代に成立した俳諧の普遍性の高さが感じられます。

「俳諧初学抄」は江戸で発刊された最初の俳諧の出版物でしたから、その点では江戸の町の俳諧の先駆者でした。

「源氏俳諧第一」と上部に書かれていて、それに続いて、「奥は宇治口きりつばの花香哉、徳元」と書かれている短冊が残っています。源氏俳諧とは源氏物語に縁のあるものを入れて百韻を付けて行くという意味で、第一は発句であることを示します。

句意としては、宇治茶を用いた口切茶会の内容になっています。「奥は宇治」は、源氏の最終が宇治十帖であることに掛け、「口きりつば」は、源氏の最初が桐壺であることに掛け、「きり」は口切と桐壺に掛かるという凝った構造になっています。

源氏物語に限らず、なにか世間によく知られたものを持って来て、それに縁のあるものを詠み込む、知識と技巧が必要な遊びです。